

# 放課後児童クラブにおける異年齢交流が 低学年児童の体力に及ぼす影響

石川 拓次・渋谷 郁子・川又 俊則

## Effect of Physical Strength for Lower Grades of Elementary School on the Different Age Exchange Among After-school Care

Takuji ISHIKAWA, Ikuko SHIBUYA and Toshinori KAWAMATA

### Summary

The purpose of this study is to consider the influence which the different age exchange in after-school care has on a lower grade child's physical strength. The subjects were 39 of the lower grade children of elementary school who belong to after-school care in Suzuka. Three times of physical strength and fitness test were performed to the subjects during the consultation period containing a summer vacation. The test of physical strength and fitness performed 20m dash, a dodge ball throw, and standing long jumps. Participant observation consisting mainly of play and different age exchange was carried out during the summer vacation. Moreover, All the subjects answered a questionnaire about play and different age exchange.

As a result, it sets to participant observation, Play of 21 kind (an outdoor 6 kind, an indoor 16 kind) was observed, among those 26.6 % (outdoor 27.3 %, indoor 28.1 %) was a group of different age. About a test of physical strength and fitness, the difference significant after consultation period was not seen. Moreover, the significant difference was not seen by comparison between groups, either. By comparison of the number of the play in different age exchange, standing long jump record was significantly higher in the higher group than the lower group ( $p < 0.05$ ).

In conclusion, it is thought that it is important for lower grade children of elementary school to experience and routinize various playing outside because of growth of mind and body. When clubs for after school activities for children are considered as a place of a life, I think that it is possible for it to concern itself with establishment of the right lifestyle, the production of a friend, and experience of various playing outside, and the possibility of being able to do in after-school care increases greatly.

## はじめに

放課後児童クラブとは、労働などの事情により昼間保護者が家庭にいない小学生の児童に対し、放課後や長期休暇中、保護者に代わって保育を行う場である。

設置の歴史的背景としては、1950 年ごろから東京や大阪の大都市圏において、働きながらの子育てを実現させることを目的にその設置活動が始まった。1962 年には新聞紙上に用いられ、その存在感は増していく。しかし、その制度化については、幾たびもの請願にもかかわらず、長い年月がかかり、ようやく 1997 年 6 月の児童福祉法の改正により、厚生労働省管轄の「放課後児童健全育成事業」として、法律の中に位置付けられた。また、2007 年 3 月には、「放課後子どもプラン」で文科省と厚労省で行っていた施策を一本化・連携化された。

放課後児童クラブの特徴の 1 つに、異年齢交流があげられる。放課後児童クラブは、小学校 1 年生から 6 年生まで（地域によっては学年の制限もある）の児童が放課後をともに過ごす場であるため、通常の学校教育にみられる横割りの関係よりも縦割りの関係が強くなる。現代の家族は、核家族化が進み、合計特殊出生率も 1.37（平成 22 年）<sup>1)</sup>と少子化の傾向は止まらず、一人っ子の割合も高くなっていることを考えると、小学校時における日常の生活で異年齢交流が行われることは少なくなっている。

一方、持永は、放課後児童クラブの異年齢交流について、子どもの要求や必要によって生まれた集団ではなく、大人たちの必要や要求によって作られたものであると述べている<sup>2)</sup>。そのため、それぞれの放課後児童クラブでは、年齢が異なるという子ども達の実を直視し、子ども相互に生じる葛藤や矛盾を教育的な行為へ引き上げるために努力を続けてきた。そこから、「伝えあい、教えあい、学びあう」という、異年齢の子どもたちが持つ教育力を発見してきたと述べられている<sup>3)</sup>。これらのことから、放課後児童クラブにおいて、頻繁に異年齢交流が行われていることは、子どもの成長過程になんらかの影響を与えるものと考えられる。

一方、近年、子どもの体力低下が問題になっている。時間、仲間、場所の不足により、外遊びや身体を動かす体験が減少していることが、体力・運動能力の低下の原因として考えられている。

昨年度、放課後児童クラブの参与観察の調査をしていく中で、遊びの中での異年齢交流が子どもも体力に大きな影響を与えているのではないかとこの着想にいたった。つまり、高学年が低学年の児童と一緒に遊ぶことにより、高学年が低学年に体力的なことだけではなく、技術的なことや規範的なことを教え、また、低学年は高学年に追いつきたいという意識が芽生えることにより、体力・運動能力の向上がみられるのではないかと考えたのである。

そこで、今回、放課後児童クラブにおける異年齢交流が低学年児童の体力に及ぼす影響について調査することとした。

## 1. 研究方法

### 1・1. 調査対象

対象は、三重県鈴鹿市にある放課後児童クラブサンキッズⅠ・Ⅱに在籍する小学校1・2年生の男女39名である。対象の身体特性を表1に示す。また、同クラブの概要について表2に示す。放課後児童クラブに研究の概要および方法について口頭および文書により説明を行い、指導員、保護者および地域の代表から構成される運営委員会の承認を得たのち、対象となる児童の保護者あてに文書を配布し、研究協力についての承諾を得た。

表 1. 身体特性											
		N	年齢 (才)		身長 (cm)		体重 (kg)		ローレル指数 (kg/cm <sup>3</sup> )		
異年齢	交流群	24	6.5 ± 0.5	118.5 ± 5.9	21.8 ± 3.2	131.3 ± 12.9					
	非交流群	15	6.7 ± 0.5	123.5 ± 6.2	23.9 ± 4.7	125.9 ± 13.9					
遊び 種類	多種類	17	6.7 ± 0.4	121.6 ± 4.7	22.5 ± 2.5	125.7 ± 14.5					
	少種類	22	6.4 ± 0.5	119.5 ± 7.5	22.7 ± 4.8	131.9 ± 12.1					
プール 参加	参加群	18	6.6 ± 0.5	121.1 ± 7.8	24.3 ± 5.2	131.3 ± 14.8					
	非参加群	19	6.6 ± 0.5	120.1 ± 5.2	21.9 ± 2.8	126.1 ± 10.7					
全体		39	6.6 ± 0.5	120.4 ± 6.5	23.4 ± 4.3	129.2 ± 13.4					

表2. 対象放課後児童クラブの概要

クラブ名	サンキッズⅠ・Ⅱ			
運営主体	公設民営			
開設日	Ⅰ：平成12年4月1日		Ⅱ：平成21年4月1日	
設置場所	鈴鹿市郡山町（小学校外専用施設）			
児童数	132人			
	1年～3年：71名		4年～6年：61名	
指導員数	10人			
設備	部屋（2室）	指導員室	調理場	トイレ
	グラウンド	砂場	机	個人ロッカー
	テレビ	エアコン	ボードゲーム	（将棋・オセロ等）
	バスケットゴール	サッカーゴール	卓球台	

### 1・2. 研究プロトコール

研究プロトコールを図1に示す。7月24日に1回目（以下、調査前と記す）の体格・体力測定および質問紙調査を行った。その後、夏休み中に遊びを中心とした参与観察を行った。また、この時期は、地域の小学校のプール開放（全9回）が行われており、その参加回数の記録も調査に使用した。9月20日に2回目（以下、調査中と記す）の体格・体力測定を行った。そして、11月20日に3回目（以下、調査後と記す）の体格・体力測定を行った。

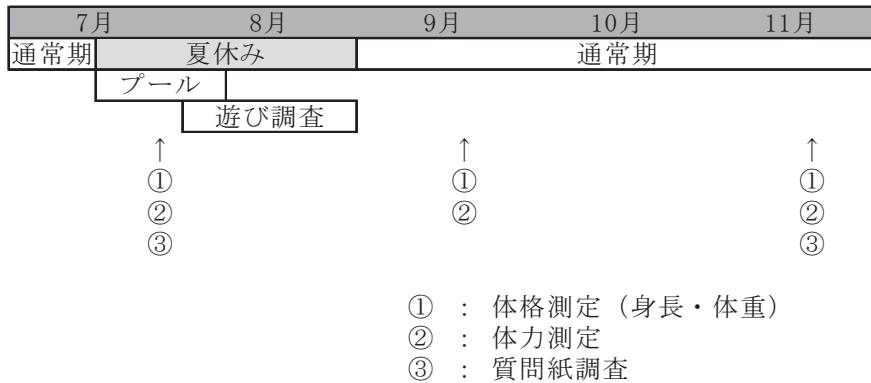


図 1. 研究プロトコール

### 1・3. 調査・測定項目

#### 1・3・1. 体格測定

対象の身長および体重を測定した。身長は専用の身長計にて、また体重は、体重体脂肪計 (TANITA 製) により計測した。また計測した身長および体重よりローレル指数を算出した。

#### 1・3・2. 体力測定

##### 1・3・2・1. 20m 走

放課後児童クラブサンキッズの専用のグラウンドにて 20m 走を行った。スタートは、スタンディングスタートの要領で行った。また、スタートの合図は、「位置について」、「用意」の後、音または声を発すると同時に旗を下から上へ振り上げることによって行った。記録は、スタートの合図からゴールライン上に胸が到達するまでに要した時間をストップウォッチにて計測した。記録は 1/10 秒単位とし、1/10 秒未満は切り上げた。

##### 1・3・2・2. ドッジボール投げ

放課後児童クラブサンキッズの専用のグラウンドにてドッジボール投げを行った。今回は、放課後児童クラブにて盛んに行われている遊びの中にドッジボールあり、普段投げる機会が多いことから測定項目として採用した。投球は、投球線の 2 m 後方より行う。投球中または投球後、投球線を踏んだり、越したりして線外に出てはならないように指示をした。記録は、ボールが落下した地点までの距離を、あらかじめ 1 m 間隔に描かれた線によって計測した。記録はメートル単位とし、メートル未満は切り捨てた。

##### 1・3・2・3. 立ち幅跳び

放課後児童クラブサンキッズの専用のグラウンドにある砂場にて立ち幅跳びを行った。測定は、両足を軽く開いて、つま先が踏み切り線の前端にそろうように立たせ、両足で同時に踏み切って前方へ跳ぶように指示をした。記録は、身体が砂場に触れた位置のうち、最も踏み切り線に近い位置と、踏み切り前の両足の中央の位置とを結ぶ直線の距離を計測した。記録はセンチメートル単位とし、センチメートル未満は切り捨てた。

#### 1・4．遊びについての参与観察

夏休み期間中、遊びについての参与観察を行った。参与観察とは、定性的な社会調査法の一つであり、その社会のメンバーの一員として生活しながら、対象社会を直接観察し、その社会生活についての聞き取りなどを行うものである。

参与観察では、図2に示す観察シートを使用し、調査を行った。調査内容は、月日、観察時間、天気、気温、室内・室外、遊びの種類、人数、性別、学年、異年齢交流の有無についてであった。

観察日数は、全16日間19回であった。

#### 1・5．異年齢交流と遊びに関する質問紙調査

異年齢交流と遊びに関する質問紙調査を図3に示す。

質問紙調査は、1回目と3回目の体格・体力測定時に自記式にて行った。

調査内容は、外遊びは好きか？、異年齢交流の有無、外遊びの種類、室内遊びの種類、異学年と遊ぶ遊びの種類（外遊び・室内遊び）であった。

質問紙調査の結果から、異年齢交流を盛んに行う群（交流群）と異年齢交流をあまり行わない群（非交流群）に分類し、比較検討を行った。また、異年齢と遊びの種類が多い群（多種類群）と遊びの種類の少ない群（少種類群）に分類し、比較検討を行った。そして、夏休み期間中における、地域のプール開放の参加日数について調査し、参加日数の多い群（参加群）と参加日数の少ない群（非参加群）に分類し、比較検討を行った。

放課後児童クラブ研究2012

### 参与観察シート

平成	24	年	8	月	日	( )	時間	時	分	天気	気温	℃
----	----	---	---	---	---	-----	----	---	---	----	----	---

指導員室

入口

入口

トイレ

門

出入口

階段

バスケットゴール

砂場

特記事項

記録者

図2．参与観察シート

## 運動・遊びについての調査

学年 名前

放課後児童クラブサンキッズでの遊びについてお聞かせください。

①外で遊ぶのは好きですか？あてはまる答えに○印をつけてください。

1. とっても好き 2. まあまあ好き 3. あんまり好きではない 4. ぜんぜん好きでない

②サンキッズでの外遊びは、何をすることが多いですか？○印をつけてください。（いくつ○印をつけても良いです）

1. ドッジボール 2. サッカー 3. バスケットボール 4. 野球 5. キックベース  
6. 鬼ごっこ 7. 砂場遊び 8. ごっこ遊び 9. その他（ ）

③サンキッズでの室内遊びは、何をすることが多いですか？○印をつけてください。（いくつ○印をつけても良いです）

1. お絵かき（ぬり絵） 2. カードゲーム（トランプ） 3. 携帯ゲーム（DSなど）  
4. ボードゲーム（将棋・オセロ） 5. ブロック 6. 本（漫画）読み  
7. テレビ（ビデオ）をみる 8. ごっこ遊び 9. その他（ ）

④サンキッズで遊ぶとき、3年生から6年生のお兄さん、お姉さんとよく遊びますか？あてはまる答えに○印をつけてください。

1. よく遊ぶ 2. まあまあよく遊ぶ 3. あんまり遊ばない 4. ぜんぜん遊ばない

⑤3年生から6年生のお兄さん、お姉さんと遊ぶとき、どんな遊びをしますか？

《外遊び》

1. ドッジボール 2. サッカー 3. バスケットボール 4. 野球 5. キックベース  
6. 鬼ごっこ 7. 砂場遊び 8. ごっこ遊び 9. その他（ ）

《室内遊び》

1. お絵かき（ぬり絵） 2. カードゲーム（トランプ） 3. 携帯ゲーム（DSなど）  
4. ボードゲーム（将棋・オセロ） 5. ブロック 6. 本（漫画）読み  
7. テレビ（ビデオ）をみる 8. ごっこ遊び 9. その他（ ）

これでおわりです。ありがとうございました。

図3 遊びと異年齢交流に関する質問紙調査用紙

## 2. 結果

### 2・1. 遊びの種類と異年齢交流

遊びの種類と異年齢交流についての結果を表4-1・2に示す。調査中における遊びは、室内遊び21種類84件、外遊び15種類29件の全36種類113件観察された。また、その中で、異年齢交流を行っていた件数は、41件（36.3%）であった。

表 4-1. 遊びにおける異年齢交流

	異年齢交流あり		異年齢交流なし		不明		総計	
室外遊び	9	31.0%	8	27.6%	12	41.4%	29	100.0%
室内遊び	32	38.1%	24	28.6%	28	33.3%	84	100.0%
総計	41	36.3%	32	28.3%	40	35.4%	113	100.0%

## 2・2・1. 体力測定結果

### 2・2・1・1. 全体の比較

#### 2・2・1・1・1. 20m 走

20m 走における全体での比較の結果を表 5 に示す。調査前  $5.0 \pm 0.3$  秒、調査中  $5.1 \pm 0.6$  秒、そして、調査後  $5.0 \pm 0.3$  秒であり、有意差はみられなかった。

#### 2・2・1・1・2. ドッジボール投げ

ドッジボール投げにおける全体での比較の結果を表 5 に示す。調査前  $6.5 \pm 3.3$ m、調査中  $6.6 \pm 3.0$ m、そして、調査後  $7.5 \pm 3.2$ m であり、有意差はみられなかった。

#### 2・2・1・1・3. 立ち幅跳び

立ち幅跳びにおける全体での比較の結果を表 5 に示す。調査前  $124.9 \pm 16.1$ cm、調査中  $117.0 \pm 21.6$ cm、そして、調査後  $122.6 \pm 17.1$ cm であり、有意差はみられなかった。

表 5. 体力測定結果

測定項目	調査前	調査中	調査後	前→中	前→後	中→後
20m 走	5.0 ± 0.3 秒	5.1 ± 0.6 秒	5.0 ± 0.3 秒	n. s.	n. s.	n. s.
ドッジボール投げ	6.6 ± 3.2 m	6.9 ± 3.0 m	7.3 ± 3.0 m	n. s.	n. s.	n. s.
立ち幅跳び	124.3 ± 15.7 cm	115.0 ± 18.9 cm	122.1 ± 18.4 cm	n. s.	n. s.	n. s.

### 2・2・1・2. 異年齢交流による比較

#### 2・2・1・2・1. 20m 走

20m 走における異年齢交流での比較の結果を表 6-1・2 に示す。交流群について、調査前  $5.0 \pm 0.3$  秒、調査中  $5.1 \pm 0.6$  秒、そして、調査後  $5.0 \pm 0.3$  秒であり、有意差はみられなかった。非交流群について、調査前  $5.0 \pm 0.4$  秒、調査中  $5.1 \pm 0.6$  秒、そして、調査後  $5.0 \pm 0.3$  秒であり、有意差はみられなかった。群間比較においては、交流群と非交流群の変化率に有意差はみられなかった。

#### 2・2・1・2・2. ドッジボール投げ

ドッジボール投げにおける異年齢交流での比較の結果を表 6-1・2 に示す。交流群について、調査前  $6.5 \pm 3.3$ m、調査中  $6.6 \pm 3.0$ m、そして、調査後  $7.5 \pm 3.2$ m であり、有意差はみられなかった。非交流群について、調査前  $6.0 \pm 2.9$ m、調査中  $6.6 \pm 3.2$ m、そして、調査後  $7.0 \pm 2.7$ m であり、有意差はみられなかった。群間比較においては、交流群と非交流群の変化率に有意差はみられなかった。

## 2・2・1・2・3. 立ち幅跳び

立ち幅跳びにおける異年齢交流での比較の結果を表6-1・2に示す。交流群について、調査前 124.9±16.1cm、調査中 117.0±21.6cm、そして、調査後 122.6±17.1cm であり、有意差はみられなかった。非交流群について、調査前 122.1±14.6cm、調査中 114.1±16.7cm、そして、調査後 120.6±19.1cm であり、有意差はみられなかった。群間比較においては、交流群と非交流群の変化率に有意差はみられなかった。

表6-1. 異年齢交流による体力測定結果（群内比較）

	測定項目	測定値			有意差		
		調査前	調査中	調査後	前→中	前→後	中→後
交流群	20m走	5.0 ± 0.3 秒	5.1 ± 0.6 秒	5.0 ± 0.3 秒	n. s.	n. s.	n. s.
	ドッジボール投げ	6.5 ± 3.3 m	6.6 ± 3.0 m	7.5 ± 3.2 m	n. s.	n. s.	n. s.
	立ち幅跳び	124.9 ± 16.1 cm	117.0 ± 21.6 cm	122.6 ± 17.1 cm	n. s.	n. s.	n. s.
非交流群	20m走	5.0 ± 0.4 秒	5.1 ± 0.6 秒	5.0 ± 0.3 秒	n. s.	n. s.	n. s.
	ドッジボール投げ	6.0 ± 2.9 m	6.6 ± 3.2 m	7.0 ± 2.7 m	n. s.	n. s.	n. s.
	立ち幅跳び	122.1 ± 14.6 cm	114.1 ± 16.7 cm	120.6 ± 19.1 cm	n. s.	n. s.	n. s.

表6-2. 異年齢交流による体力測定結果（群間比較）

	群	変化率			有意差		
		前→中	前→後	中→後	前→中	前→後	中→後
20m走	交流群	1.2 ± 0.1 %	0.2 ± 0.0 %	-3.0 ± 0.1 %	n. s.	n. s.	n. s.
	非交流群	2.0 ± 0.1 %	0.7 ± 0.1 %	-1.7 ± 0.1 %	n. s.	n. s.	n. s.
ドッジ	交流群	2.2 ± 0.3 %	9.5 ± 0.2 %	5.8 ± 0.3 %	n. s.	n. s.	n. s.
	非交流群	3.6 ± 0.3 %	12.4 ± 0.2 %	-4.3 ± 0.3 %	n. s.	n. s.	n. s.
立ち幅跳	交流群	-9.1 ± 0.2 %	-2.8 ± 0.1 %	4.5 ± 0.1 %	n. s.	n. s.	n. s.
	非交流群	-8.5 ± 0.2 %	-3.0 ± 0.1 %	5.6 ± 0.2 %	n. s.	n. s.	n. s.

## 2・2・1・3. 異年齢交流の遊びの種類による比較

### 2・2・1・3・1. 20m 走

20m走における異年齢交流の遊びの種類による比較の結果を表7に示す。群間比較において、多種類群 4.9±0.2 秒、非参加群 5.1±0.4 秒であり、有意差はみられなかった。

### 2・2・1・3・2. ドッジボール投げ

ドッジボール投げにおける異年齢交流の遊びの種類による比較の結果を表7に示す。群間比較において、多種類群 7.0±3.5m、非参加群 5.7±2.8mであり、有意差はみられなかった。

### 2・2・1・3・3. 立ち幅跳び

立ち幅跳びにおける異年齢交流の遊びの種類による比較の結果を表7に示す。群間比較において、多種類群 129.8±16.1cm、非参加群 119.0±13.4cm であり、有意に多種類群の方が記録が高かった（ $p<0.05$ ）。



表 7. 異年齢交流における遊びの種類による体力測定結果 (群間比較)

	群	測定値	有意差
20m走	多種類群	4.9 ± 0.2 秒	n. s.
	少種類群	5.1 ± 0.4 秒	
ドッジ	多種類群	7.0 ± 3.5 m	n. s.
	少種類群	5.7 ± 2.8 m	
立ち幅跳	多種類群	129.8 ± 16.1 cm	*
	少種類群	119.0 ± 13.4 cm	

\* :  $p < 0.05$

## 2・2・1・4. プール参加回数による比較

### 2・2・1・4・1. 20m 走

20m走におけるプール参加回数での比較の結果を表 8-1・2 に示す。参加群について、調査前  $5.1 \pm 0.3$  秒、調査中  $5.1 \pm 0.6$  秒であり、有意差はみられなかった。非参加群について、調査前  $5.0 \pm 0.3$  秒、調査中  $5.1 \pm 0.6$  秒であり、有意差はみられなかった。群間比較においては、参加群と非参加群の変化率に有意差はみられなかった。

### 2・2・1・4・2. ドッジボール投げ

ドッジボール投げにおけるプール参加回数での比較の結果を表 8-1・2 に示す。参加群について、調査前  $5.9 \pm 3.0$ m、調査中  $6.6 \pm 2.8$ m であり、有意差はみられなかった。非参加群について、調査前  $6.6 \pm 3.4$ m、調査中  $6.6 \pm 3.3$ m であり、有意差はみられなかった。群間比較においては、参加群と非参加群の変化率に有意差はみられなかった。

### 2・2・1・4・3. 立ち幅跳び

立ち幅跳びにおけるプール参加回数での比較の結果を表 8-1・2 に示す。参加群について、調査前  $126.4 \pm 17.1$ cm、調査中  $121.9 \pm 18.7$ cm であり、有意差はみられなかった。非参加群について、調査前  $122.0 \pm 17.1$ cm、調査中  $110.5 \pm 19.4$ cm であり、有意に記録が低下した ( $p < 0.05$ )。群間比較においては、参加群と非参加群の変化率に有意差はみられなかった。

表 8-1. プール参加回数による体力測定結果 (群内比較)

	項目	測定値		有意差
		調査前	調査中	
参加群	20m走	5.1 ± 0.3 秒	5.1 ± 0.6 秒	n. s.
	ドッジボール投げ	5.9 ± 3.0 m	6.6 ± 2.8 m	n. s.
	立ち幅跳び	126.4 ± 12.9 cm	121.9 ± 18.7 cm	n. s.
非参加群	20m走	5.0 ± 0.3 秒	5.1 ± 0.6 秒	n. s.
	ドッジボール投げ	6.6 ± 3.4 m	6.6 ± 3.3 m	n. s.
	立ち幅跳び	122.0 ± 17.1 cm	110.5 ± 19.4 cm	*

\* :  $p < 0.05$ 

表 8-2. プール参加回数による体力測定結果 (群間比較)

	群	変化率 前→中	有意差
20m走	参加群	0.2 ± 0.1 %	n. s.
	非参加群	2.6 ± 0.1 %	n. s.
ドッジ	参加群	9.1 ± 0.3 %	n. s.
	非参加群	-3.3 ± 0.3 %	n. s.
立ち幅跳	参加群	-5.1 ± 0.1 %	n. s.
	非参加群	-12.3 ± 0.2 %	n. s.

### 3. 考察

近年、子どもの体力・運動能力の低下が問題になっている。武藤<sup>4)</sup>は、小中学生の体力・運動能力を 20 年前の同年代と比較し、走る力、投げる力、跳ぶ力、握力のいずれも、現在の児童生徒の方が低く、全体的な低下現象の中にあって、体力・運動能力の低下は、運動・スポーツをしない子どものほうがより大きいことも示されていると述べている。その理由として、時間、空間、そして、仲間の「3 間」の不足が指摘されている。しかし、放課後児童クラブにおいては、この「3 間」の問題については、ほぼ解決されると考えられる。

まず、時間についてであるが、川又<sup>5)</sup>は、放課後児童クラブを児童が放課後を過ごす「生活の場」として捉えている。児童は、放課後および長期休暇中の多くの時間を放課後児童クラブで過ごす。全国学童保育連絡協議会の調査によると、低学年の児童において、小学校で過ごす時間は、年間 1140 時間であり、一方、放課後児童クラブで過ごす時間は、年間 1650 時間であると報告している<sup>6)</sup>。つまり、低学年の児童は年間を通して、学校に行っているよりも明らかに多い時間を放課後児童クラブで過ごすこととなる。これにより「3 間」の一つである時間の問題は解決されるものと考えられる。

次に空間、つまり、遊び場所の問題である。全国学童保育連絡協議会の調査によると、放課

後児童クラブの設置場所について、全体の過半数である 51.8%が学校施設内であると報告している<sup>7)</sup>。福永らは、三重県内の放課後児童クラブの施設について調査した結果、学校施設内が 32%であったと報告している<sup>8)</sup>。学校内施設である場合、多くは学校の校庭を遊び場として使用している例は多い。また、今回調査の対象としたサンキッズⅠ・Ⅱは専用のグラウンドを備えており、外遊びをする環境は整っていた。一方で、福永らは、設置希望の施設について調査したところ、広い園庭を望む声も多く、まだ、遊び場について十分でない放課後児童クラブも存在するが、多くの放課後児童クラブが空間、つまり、遊び場の確保が出来ているものと考えられる。

そして、最後に仲間である。現代の家族は、核家族化が進み、合計特殊出生率も 1.37（平成 22 年）<sup>1)</sup>と少子化の傾向は止まらず、一人っ子の割合も高くなっていることを考えると、小学校時における日常の生活で異年齢交流が行われることは少なくなっている。しかし、1年生から6年生までがいる放課後児童クラブにおいては、日常的に遊びの場面でも、その他の生活の場面でも異年齢交流が行われている。本調査で行った夏季休暇中における遊びと異年齢交流の調査においても、27%の遊びで異年齢交流が行われていた。福永らは、異年齢交流の指導員の促しについて調査をし、大規模および中規模の放課後児童クラブにおいては、小規模の放課後児童クラブと比較して、指導員が異年齢交流を促すことが多いと報告している。しかし、本調査の対象であるサンキッズはⅠ・Ⅱを合わせて在籍児童が 130 名を超える大規模な放課後児童クラブであったが、指導員の方への聞き取り調査によると、指導員としてあまり異年齢交流を促すことはなく、自然な流れの中でグループが形成されると述べられている<sup>9)</sup>。つまり、それくらい自然な流れの中で異年齢交流が進められており、仲間の不足により、遊びの機会が減っているということもないと考えられる。以上のように、放課後児童クラブにおいては、子どもの体力・運動能力の低下の要因であるとされる時間、空間、そして、仲間の不足が解消されていることが伺われる。

これらのことを踏まえて、放課後児童クラブにおける体力・運動能力の向上について考えてみたい。本調査の結果として、異年齢交流の参加および水泳の参加回数の比較では、すべての測定項目において、期間内で測定記録の向上はみられたものの、群内比較および群間比較で有意差はみられなかった。一方、異年齢交流の遊びの種類での比較においては、すべての測定項目において異年齢交流の際に多くの遊びを行う児童の方が記録が高く、特に、立ち幅跳びにおいて有意差がみられた。このように本調査においては、体力の向上について、予想する結果とはならなかった。本調査は、夏季休暇からその後 11 月後半までの期間で行われたが、特に、夏季休暇中においては、熱中症への対策として、屋外で遊ぶ時間を決め、屋外の遊びよりも室内の遊びを中心とし、身体活動は少なかったものと考えられる。このことが、体力測定項目の記録の向上として表れなかった一因と考える。また、今回測定した項目の体力要素である、「走る」、「跳ぶ」、「投げる」を本調査の遊びの内容として考えると、参与観察によってみられた屋外での遊びと水泳では、この体力要素を向上させるのに不十分であった可能性も考えられる。

放課後児童クラブにおける遊びの位置づけについて、高橋<sup>10)</sup>は、保護者や指導員にとっては、「保育」や「教育」の場であっても、子どもにとっては「遊び」の場でなければならない、子どもは「遊び」を通して知育・徳育・体育を身につけ、それらを伸ばすと考え、放課後児童クラブは、そのような「遊び」の場を保障する場でなくてはならないと述べている。また、古城<sup>11)</sup>は、放課後児童クラブにおける遊びの実践指導を通して、低学年児童の遊びはスポーツのように制度化・形式化された遊びと異なると報告している。

つまり、放課後児童クラブにおける遊びは、子ども達の生活の一部であり、楽しく、充実した生活を送る一つ的手段であると考えることができる。その中で、山崎<sup>12)</sup>や三河<sup>13)</sup>が示すように、異年齢の仲間が関わる生活の中で成長する子ども達の姿を目の当たりにするのである。低学年の児童は、上級生と一緒に遊ぶことによって、上級生を尊敬し、憧れの眼差しでみて、一歩でも近づきたいと思うようになり、上級生の児童は、低学年の児童と一緒に遊ぶことによって、情緒的な成長をみせることがある。

また、日常的に外遊びを提供できる場としての放課後児童クラブの役割も重要であると考ええる。本調査の質問紙調査においても外遊びが好きかの問いに対して、すべての児童が「とても好き」もしくは「まあまあ好き」と回答している。放課後児童クラブという児童にとって日常生活の中に組み入れられた外遊びの経験は、運動・スポーツをする児童としない児童の二極化が進む現在において重要な役割を示すものであると考える。

国立青少年教育振興機構国立オリンピック記念青少年総合センターによると、青少年の自然体験について、昆虫を捕まえた経験、海や川での貝取りや魚釣りの経験、大きな木に登った経験、太陽が昇るところおよび沈むところを覗いた経験は平成10年と平成17年の比較において、平成17年の方がどの項目も「ほとんどない」の割合が増加していると報告している<sup>14)</sup>。このような自然体験を含めた外遊びを小学校低学年から日常生活の中で習慣づけることは、運動嫌いをなくす上での一つの方策となると考える。

また、体力と生活習慣の関係においても、朝食を摂取している群は20mシャトルランの結果が摂取していない群と比べて高い傾向にあると報告されていること<sup>15)</sup>からも、正しい生活習慣の確立は、体力面の充実からも必要であると考ええる。一方で、スポーツを過剰に行い、いわゆる「使い過ぎ症候群」とよばれる、スポーツ障害を患う児童も後を絶たない<sup>16)</sup>。そこで、小学校低学年においては、一つの運動・スポーツに固執するのではなく、さまざまな外遊び（運動・スポーツ）を行うことが、そのような障害の予防にも効果があると考ええる。放課後児童クラブを生活の場として考えた時、正しい生活習慣の確立、仲間づくり、そして、さまざまな外遊び（運動・スポーツ）を経験する場としても大きく関わっていくことが可能であり、放課後児童クラブで出来ることの可能性は大きく広がっていくものと考ええる。

## おわりに

以上のように、放課後児童クラブにおける異年齢交流において、期間前後および群間比較で

有意な差はみられなかったが、小学校低学年の時期にさまざまな外遊びを経験し、習慣化することは、その後の心身の成長に大きな影響を与えるものと考えられる。放課後児童クラブを生活の場として考えた時、正しい生活習慣の確立、仲間づくり、そして、さまざまな外遊びの経験に関わっていくことが可能であり、放課後児童クラブで出来ることの可能性は大きく広がっていくものとする。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省：平成 22 年（2010）人口動態統計（確定数）の概況，  
[http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei10/dl/09\\_h5.pdf](http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei10/dl/09_h5.pdf), 2011
- 2) 持永正夫：我が子が歩んだ異年齢集団 特集／生活づくりと異年齢集団，日本の学童保育，90，24-27，1983
- 3) 日本の学童保育編集部：学童保育の異年齢集団とは－そのたしかめのために－ 特集／学童保育の異年齢集団を学ぶ，78，8-9，1982
- 4) 武藤芳照：第 1 章 児童・生徒の体力・運動能力およびスポーツ傷害の実態，1. 児童・生徒の生活習慣の現状と体力・運動能力の実態，学校における運動器検診ハンドブック 発育期のスポーツ傷害の予防，「運動器の 10 年」日本委員会編，1-8，東京，2007
- 5) 川又俊則：放課後児童クラブと学校教育に関する一考察，鈴鹿短期大学紀要，32，51-70，2012
- 6) 全国学童保育連絡協議会：学童保育の実施状況調査，2011
- 7) 全国学童保育連絡協議会：学童保育の実施状況調査（2012 年 5 月 1 日現在），  
[http://www2s.biglobe.ne.jp/Gakudou/2012kasyosuu\\_.pdf](http://www2s.biglobe.ne.jp/Gakudou/2012kasyosuu_.pdf), 2012
- 8) 福永峰子，永石喜代子：第 2 章 放課後児童クラブにおけるおやつと生活活動に関する調査，「学童保育の『異年齢交流』と『食育』に関する研究」報告書，21-53，2012
- 9) 石川拓次：第 3 章 放課後児童クラブにおける異年齢交流と食育に関する研究－三重県内の放課後児童クラブの聞き取り調査と参与観察を通して－，「学童保育の『異年齢交流』と『食育』に関する研究」報告書，54-69，2012
- 10) 高橋ひとみ：学童保育と「子どもの遊び」に関する一考察，桃山学院大学人間科学，31，21-40，2006
- 11) 古城健一，川内敬介：学童保育クラブにおける遊びの研究－運動遊びを中心として，大分大学教育福祉科学部研究紀要，30(1)，71-86，2008
- 12) 山崎素裕：三年生ってすごいなあ－児童館内の学童クラブで過ごす子どもたち 特集／学童保育－異年齢の子どもたち，日本の学童保育，415，6-9，2010
- 13) 三河孝子：異年齢集団のなかでよみがえる子どもたち 特集／学童保育の異年齢集団を学ぶ，日本の学童保育，78，28-30，1982

- 14) 国立青少年教育振興機構国立オリンピック記念青少年総合センター：青少年の自然体験活動等に関する実態調査報告書，2006
- 15) 文部科学省：児童・生徒の体力・運動能力，体力・運動能力の概要，2006
- 16) 松瀬学：「スポーツにとかく痛みはつきものだ」をなくすために，学校における運動器検診ハンドブック 発育期のスポーツ傷害の予防，「運動器の10年」日本委員会編，68－69，東京，2007